第8回みんゆう新聞感想文コンクール作品紹介

小学3・4年生の部　優秀賞

「この世に必要のない人間なんていない」

大島小4年　桜井（さくらい）　亮人（あきと）君

「障害者はこの世に必要ない。」これは、相模原障害者施設殺傷事件の犯人が言った言葉だ。

二〇一六年、七月二十六日、犯人は、施設の裏口から敷地内に入り、ハンマーで居住棟の窓ガラスを割って、そこから侵入した。そして、結束バンドを使って職員らを拘束し、体の一部をバンドで縛った。犯人は意思疎通のできない障害者を「この世に必要ない」と殺害目的で入り、声をかけながら、返事のない障害者をねらって次々と刺していった。死亡者は十九名。第二次世界大戦後の日本で起きた殺人事件としては死亡者の数が最も多く、戦後最悪の大量殺人事件だった。ぼくは命はとても重い物だと思っているので、その命を軽々と消した犯人にいかりを覚えた。

以前、テレビで障害のあるあゆみさんとその家族を密着している番組を見た。あゆみさんは、自分でごはんを食べる事もできず、医りょう介ごも必要で、両親は二十四時間体制で寝る時間はほとんどなかった。正直ぼくには、大変そうに見えた。でも、家族の方々が言っていた。

「生きてくれているだけで幸せです。」

と。ただ、家族の方にはなやみもある。今はいいが、後々あゆみさんが一人になってしまった時、どうやって生きていくのか心配だと言う。施設を探しているそうだが、いろいろ問題があり決まらない。それは他の障害を持っている方の家族も同じだと思う。施設が少なくて困っている方もいるそうだ。施設をもっとふやせないのだろうか。ぼく、家族が障害者だったらと思うとひと事ではない。お互いよく話し合って解決できないのだろうか。

「この世に必要のない人間」なんてどこにもいない。ぼくは人間はみんな同じだと思う。

「天てきで害虫をやっつけろ。」

湊小3年　独鈷（どっこ）　空優（くうや）君

「えっ。カメムシの仲間が野さいにつく害虫を食べてくれるの？。」

ぼくにとってのカメムシは、くさい臭いを出すイヤな虫ですが、カメムシの仲間、タバコカスミカメは野さいにとって、害虫を食べてくれる味方の虫だと知りおどろきました。新聞には、のう薬のかわりに害虫の天てきを使う研究が進んでいることや、天てきとして活やくする昆虫について書かれていました。

ぼくは、ばぁばの手伝いで畑へ行った時のことを思い出しました。畑の野さいに数匹のテントウムシがついているのを見付けたぼくは、野さいを守ろうとつかまえていました。すると、ばぁばに、

「テントウムシは良い虫だから、そっとしておいてね。」

と、言われました。その時はなぜ良い虫なのか分かりませんでしたが、新聞を読み、テントウムシはアブラムシをいっぱい食べてくれる虫だと分かりました。ぼくの身近にも天てきとして活やくする昆虫がいたのです。そして、ぼくのばぁばが、のう薬をあまり使わずに天てきの昆虫を使い野さい作りをしていたことを知りました。

ぼくは、ばぁばの野さいを守るため、畑でテントウムシい外の天てきになる昆虫をさがし出したいです。そして、ばぁばの野さい作りの役に立ちたいと思いました。

これから、今い上に害虫の天てきの研究が進み、のう薬にたよらない野さい作りが出来、たくさんの人たちが安心しておいしい野さいを食べられるようになればうれしいです。

「子どものひんこんをへらそう」

桜の聖母学院小4年　三浦（みうら）　涼桜（りお）さん

わたしは新聞を読んでいたら、東日本の小学生の食事に関する記事を発見しました。きょう味を持ち読んでいくと、その内容にわたしは目を丸く大きくさせられました。なぜなら、日本の十七才までの子どもの「七人に一人がひんこん」という記事の内容だったからです。

わたしは日本には食べ物も服も、住む家もみんなあると思っていたので、日本でもひんこんの子どもがいるのかなと、ぎもんに思うのとおどろいた気持ちになりました。それで、「ひんこん」について調べてみると二種類あり、一つ目は、まずしい国のように、今日生きるために必要な食べ物がないという命に直せつ関わるひんこんです。

二つ目は、年しゅうがひくい家庭でふつうの生活を送ることができない場合のひんこんがあるのだそうです。

日本の場合は、二つ目のひんこんだそうです。えいようのあるごはんを食べられなくて、体に必要な魚や鉄、たんぱくしつが足りず、ほとんどが給食にたよっていると書いてありました。食事がアイス一本という記事もあって、信じられませんでした。

わたしはこの新聞を見て、給食のありがたさが分かりました。そして、わたしがふだん食べている食事も大切に食べたいと思いました。そして、夕食ぬきなどをしないできちんと三食食べ、食べ物をのこさないようにしたいです。子どもの生まれた家庭によって、ひんこんになるのはかわいそうです。新聞に、「福島こども食どうネットワーク」が作られたと書いてあったのでどんな子どもでも、この食どうに行ってえいようをとって、こまったことがあったら話を聞いておうえんしてあげたいです。

小学5・6年生の部　優秀賞

「子ども食堂とひん困」

御山小5年　明石（あかし）　爽（さわ）さん

この記事には、日本で七人に一人の子どもがひん困と言われ、その子どもたちのための「子ども食堂」を現在の三倍に増やしていくということが書かれています。

子ども食堂とは、親が仕事でおそくて一人でさみしい子どものための食堂です。他にはお金に困っている人なども来ます。政府は今、子ども食堂を増やすことに力を入れているそうです。

私は、お父さんとお母さんがいて、毎日家族と一しょにおいしいごはんを食べています。私は今まで安心してごはんを食べるのがあたり前と思っていたのに、一人でごはんを食べている子どもがたくさんいるということを初めて知りました。私は家族と一しょにごはんを食べる生活があたり前だと思えることが幸せだと思います。

もし私が一人でごはんを食べるような生活だったらと考えると毎日さびしくて、不安だと思います。そういう子どもにとって、子ども食堂はとても良い所だと思います。おいしいごはんをみんなで食べられるからです。でも私は、そもそもみんなが家で安心して家族とごはんが食べられていれば、子ども食堂に行くことはないと思います。

子ども食堂に行く人の多くが、家に一人でさびしく食事をしなければいけない状きょうです。本当は、その状きょうをなんとかしなければいけないと思います。

ひん困問題を解決するためには、子ども食堂をただ増やすだけでなく、子どもが一人になる時間を減らさなくてはいけないと思います。大人が子どもを育てやすい働き方や、子どもと一しょにいる時間を持てるような世界に変えることに政府は力をいれていくべきだと思います。

「花が導く復興」

桜の聖母学院小6年　豊岡（とよおか）　奏多（かなた）君

東日本大震災から六年。ぼくの祖父母の家がある飯舘村は、一部を除いて、福島第一原発事故による避難指示が解除された。だけど、ぼくの目に映る飯舘村の現状は、辺り一面に広がる荒れ放題の田畑。除染土の山の仮置き場だ。復興には、ほど遠いように思えた。

そして、避難指示解除から間もない四月。祖父母の家に泊まり、姉と近所を散歩している時の事だった。車が急に止まり、「会田さんの三千本の桜は、どの辺りですか。」と道を聞かれたのだ。ぼくは、新聞の記事や祖母から話を聞いて興味を持ち、実際に見に行ったことがあるので知っていた。だけど驚いた。こんな場所に、わざわざ桜の花を見るために訪れる人がいるなんて、思ってもみなかったからだ。これが、飯舘村の復興を感じた瞬間だった。そして、花には、人を引き寄せるパワーがあることを、ぼくはこの時知った。

道を聞かれたその桜は、祖父母と同じ地区の会田さん夫婦によって、約二十年にわたり植え続けられている。震災後、あきらめかけた植樹も、全国からの苗木の支援や植樹のボランティアに支えられて再開できたそうだ。その後、飯舘復興の桜と名付けられ、今では三千本をこえるまでになっている。

ぼくが見た、飯舘復興の桜。それは、きれいさの中に力強さも感じるように思えた。困難を乗りこえ、植え続けられた桜の木。そうして咲かせる桜の花は、見る人を元気にし、笑顔にする。心の復興も応援してくれると思った。そしてぼくは、飯舘村の復興のヒントを見つけた。

荒れた田畑に花を植え、村全体を花でいっぱいにする。それが、飯舘村に笑顔があふれ、たくさんの観光客が訪れる、復興につながると。ぼくは、明るい未来を予測した。

「最強の城『江戸城』」

湯本一小5年　藁谷（わらがい）　琢也（たくや）君

ぼくは歴史が大好きです。歴史上には様々な人物がいて、その人物の人生を知ることに興味があります。徳川家康は特に大好きな人物で、家臣を大切にするところがみ力です。

その徳川家康が、太田道灌が築いた江戸城を、最強の要塞機能を備えた城にしたことが、発見された絵図から分かったと知り、さすが徳川家康だな、と思いました。攻め込みづらい構造にするため、城へきを交互にしたり、攻め込んでくるてきの勢いを止めるため、複雑な形態の出入り口にしたりしているのは、徳川家康は江戸が戦場になるかもしれない、と予想していたのではないかと考えました。若い豊臣秀頼に、いつ天下をとられるか分からないから、江戸城を最強の城にする必要があったのだと思います。

ぼくがぎ問に思ったのは、なぜ徳川家康は大天守と小天守を多聞櫓でつないだのか、ということです。江戸城は、大天守と小天守が石垣のそばに建ててあるため、石垣を登ってててきが攻めてきやすかったのではないか、と考えました。だから攻撃を受けた時に、多聞櫓から瞬時に反撃をするために、小天守から多聞櫓が近ければ、すぐに人を配置できるし、大天守にいる家康も、状況の報告をすぐに受けやすいのではないか、と想像しました。家康がいない今、本当のことは分かりませんが、ぼくが家康だったら、同じように考えて江戸城を最強の城にできるかな、やっぱりそれは家康だからできたのかな、と思いました。

今の時代なら、インターネットなどで調べて情報を得られるので、最強の城を造るのは容易なことかもしれませんが、家康の時代に、他の城のいいところを参考にして、ここまで造るのはすごいことだと思います。徳川家康の天下統一への熱い思いが伝わってきます。